

中日合同シンポジウムを主催して：烟台大学訪問と 土地利用調査（特別紀行）

江頭, 和彦
九州大学大学院農学研究院

松元, 順
鹿児島県農産加工研究指導センター

<https://doi.org/10.15017/4357>

出版情報：九州大学大学院農学研究院学芸雑誌. 60 (1), pp.119-134, 2005-02-01. 九州大学大学院農学
研究院
バージョン：
権利関係：

特別紀行

中日合同シンポジウムを主催して
— 烟台大学訪問と土地利用調査 —

江頭和彦*・松元 順¹

九州大学大学院農学研究院植物資源科学部門植物生産科学講座土壌学研究室
(2004年10月25日受付, 2004年11月11日受理)

China-Japan Joint Symposium on Agricultural,
Forestry and Environmental Sciences
— Visit of Yantai University and Field Survey on Land Use
in and around Yantai City, Shandong Province —

Kazuhiko EGASHIRA* and Jun MATSUMOTO¹

Laboratory of Soil Science, Division of Soil Science and Plant Production,
Department of Plant Resources, Faculty of Agriculture,
Kyushu University, Fukuoka 812-8581, Japan

はじめに

2004年9月22日～27日の日程で、中国山東省の北東端に位置する烟台市 (Yantai city) と烟台大学 (Yantai University) を訪問しました。目的は、烟台大学での中日合同シンポジウム開催と、2004年4月から同大学環境与材料工程学院 (School of Environment and Material Engineering) に准教授 (Associate Professor) として勤務することになった韓京龍さんを訪問することです。中日合同シンポジウムは、烟台大学の創立二十周年を記念して、「農林業・環境科学に関する中日合同シンポジウム」と題して、9月24日に行いました。韓京龍さんは、1997年4月から2000年3月まで、九州大学大学院農学研究院農芸化学専攻博士後期課程に在学し、私 (江頭) を指導教官として博士 (農学) の学位を取得しました。その後九州大学大学院農学研究院に訪問研究員として在籍し、2004年3月烟台大学に職を得て帰国しました。その彼の新しい職場と仕事振りを見るためです。国際シンポジウムの開催及び留学生のアフターケアは、国際協力

の大きな要素です。韓京龍さんの奥さんの金福順さんは、2004年3月福岡女子大学大学院人間環境学研究科栄養健康科学専攻修士課程を修了し、2004年5月から烟台大学外国語学院の日本語教師 (講師) として勤務しています。韓さん夫婦は朝鮮族で、一人娘の韓喜玲さんは何度か日本の両親の許を訪れ、中国語とハンゲルの他に、日本語もやや理解します。今回の烟台大学訪問で、公私共に大変お世話になりました韓京龍さんと金福順さん、及び郭明瑞校長並びに徐惠忠学院長を始め烟台大学の関係の方々々に心よりの謝意を表します。

福岡—青島—烟台

9月22日 (水) 午後2時の集合時刻で、福岡空港国際線ターミナル3階出発ロビーに集合する。同行は、矢幡久教授・熱帯農学研究センター長、山中一男農学部事務部事務部長補佐、窪田征隆農学部事務部学生掛員、馬場俊幸大学院生物資源環境科学府植物資源科学専攻博士後期課程院生、橋本俊二郎中村学園大学教授、松元順鹿児島県農産物加工研究指導センター流通保蔵研究室長、松元祥子長崎国際大学3年生の7人。全てを

¹鹿児島県農産物加工研究指導センター

¹Institute of Food Processing and Utilization, Kagoshima Prefecture

*Corresponding author (E-mail: kegashi@agr.kyushu-u.ac.jp)

知っていたのは私だけという、いつもながらの多彩なメンバーである。友好第一、まずは互いに紹介し合う。搭乗手続きをし、手荷物検査を受け、出国手続きをして、待合室に入る。ビールその他の飲料水で乾杯して軽く結団式。日本では、暫らく前から出入国カードを書かなくてもよくなったが、今回の訪問から、短期の滞在であれば中国は査証が不要となる。一方で、米国のみが入国を厳しくする。

MU290便は本来の中国東方航空の所有で、尾翼に燕のマーク。機体はA300、通路を挟んで両側に3席ずつ。機内はほぼ満席、西安行きは団体旅行客も同乗。乗る前に聞いた話では、西安の後敦煌へ行くとのこと。MU290便、16時5分（予定は15時40分）に離陸。上昇を続け、3分もせず雲の上。転回して北に向き、5分程で海に出る。海上に出て雲が切れ、眼下に志賀島を見る。薄い筋雲と白い舟の航跡を見て、離陸後12分程でまた厚い雲の上。離陸して16分程で対馬上空にかかるテレビモニターに表示される。福岡-青島間1,240km、1時間40分の飛行時間との機内放送。機内放送は中国語、日本語と続く。対馬海峡の上、雲の移り変わる形に気を取られているうちに、16時28分韓国上空にさしかかる。モニターの表示によれば、釜山の少し西から韓国に入る。眼下に見えるのは山ばかり。16時33分に機内食。サンドウィッチとパンと西瓜と菓子。16時50分漢江を見る。流れる街はソウル。左に旋回し、16時53分多島海とすぐ下に仁川空港。遠くに見える雲の下は北朝鮮。16時56分黄海に出る。17時ちょうどに時計の針を1時間遅らせ、中国時間に合わせる。配られた入国カードと検疫カードに記入する。微かに山東半島の山影を見ながら、16時55分青島国際空港に着陸する。着陸前、機体が少し揺れる。地上温度24℃。入国審査、税関検査を簡単に済ませ、ターミナルの外に出る。入国審査の時係官から入国目的を問われ、係官の日本語についつられて、烟台大学での国際シンポジウム開催と日本語で答えてしまう。帰国時に気が付いたのだが、青島流亭空港、昨2003年8月西安からの帰りに一閃着あったターミナルビルの横に、その二倍以上の大きさでターミナルビルが新築されていた。

青島空港には、韓京龍さんと張副院長が、烟台市から迎えに来てくれていた。烟台市人口80万人、周囲を含めると350万人近くと、張副院長から聞く。17時45分、迎いのマイクロバスと2台のタクシーに分乗して烟台市に向かう。マイクロバスの座席が荷物で占有され、私を含む6人はタクシーで移動することとなった次第。片側3車線（車が2車線でその外側にバイク

と自転車の車線）の道路、インフラの整備が急速に進む。道路脇の街路樹はポプラとプラタナス。18時頃烟台市へ戻るタクシーを見つけ、それに乗り換える。韓さんによれば、交渉次第で、青島から烟台へ行くタクシーに比べ値段が半分近くにまで安くなるとのこと。青島-烟台間は約200km。道路状態に比べて電力事情は悪い。街灯は無く、明かりは車のライトの他は、道路脇の住家・工場・食堂から漏れてくるわずかな光のみ。その暗がりの中をタクシーは、時速100km近いスピードで飛ばす。横断歩道や交通信号は無く、道路を横切る人や自転車は、ある意味では決死の渡りとなる。19時15分萊陽市に入る。青島と烟台の間で最大の都市である。烟台まで95kmの標識。20時15分烟台市に入る。ナトリウムランプの街灯が並び、道路は片側4車線になる。20時25分頃ホテル着。40分程待って、張副院長が運転するマイクロバスが到着する。タクシーがいかに飛ばしていたかがわかる。

華安賓館

ホテルは烟台大学傍の華安賓館（Hua An hotel）、5階建ての立派な造りである（図1）。古い館を思わせる。松元父娘は、ホテルから歩いて数分の、集合住宅の7階にある韓さん夫婦の家に泊まることになる。ホテルで一閃着。韓さんが予約した時は3階の部屋であったが、チェックインの段になって、それが5階に変わっていた。中国ではよくある話である。韓さんが粘り強く交渉し、事によってはホテル変更も辞さない覚悟であったが、事情が変わることはなく、結局5階の部屋になる。私は5階の端の505号室。ホテルにエレベーターは無く、5階の部屋まで荷物を運び上げるのは一苦労だった。日が経つにつれ、5階までの上り下りは段々と体にこたえるようになり、何故韓さんが3階にこだわったかがわかる。韓さんによれば、中国では、ホテルは5階建て、住宅は7階建てまでエレベーターを設置しなければなくてもよいとのこと。

全員の到着を待って、午後9時をやや過ぎて、ホテル併設の食堂で遅めの夕食。烟台は海に近く、海鮮料理が中心となる（中華料理の中では魯菜と呼ばれる）。味は口に合う。アルコールは烟台ビールから始まり、赤ワインを飲んで、烟台クーニャン（クーは古、ニャンは酒偏に良と書く）までいく。烟台クーニャン、32度程でそれほど強くはなく、生で飲んで乾杯を繰り返す。張副院長とはこの時の夕食までで、その後は、中日合同シンポジウム会場でも見かけず、烟台滞在中全く顔を会わさなかった。

華安賓館、外側の立派な造りの割には内側の設備はややお粗末で、中国内陸部の地方都市並である。部屋にはバス・トイレが付く。バスはシャワーだけで、バスタブは無し。お湯は出る。ツインのベッドとベッドサイドテーブル。円卓と2脚の椅子。円卓には小さな純浄水の容器（水サーバー）が載る。ただ警戒して口にせず、代わりにペットボトルを持ち込む。空調機はあるが、この時期暑くも寒くもなく、一度も使わなかった。夜部屋にいる時は、窓を開けて涼をとり、寝る時閉める。小さいながらクローゼットもある。テレビの載る台とそのサイドテーブル。テレビは環保TV。テレビの載る台を、テレビを少し脇に避けてもの書きに使い、サイドテーブルに旅行バッグを置く。明かりはベッドの上の明かりと室内灯とテレビの載る台の明かりで、電力事情の悪さの割には、室内での過ごしともの書きには不自由せず。

翌23日（木）、朝6時半に起床。先ずシャワーを浴びる。人々は既に動き始めている。越南もそうだが、中国も朝は早い。8時半に1階のロビーに揃い、ホテル併設の食堂で朝食（図2）。朝食の品数は多く、内容は寧夏回族自治区の銀川と固原での朝食に似る（江頭ら、1999；江頭、2004）。米の粥と高粱の粥、花巻と包子、それに数多くの漬物的野菜。卵はピータンと何かの汁に漬けて茹でたもの。飲物は牛乳かヨーグルト。食べ過ぎと塩分の取り過ぎに注意すれば、健康には良いと思われる。

表敬訪問

23日の朝食後、9時15分にホテルロビーに集まり、烟台大学に移動する。烟台大学の正門までホテルから歩いて3分程。烟台大学、広大なキャンパスで、校内は整然として奇麗である。正門に入ってすぐの歩道に、24日の中日合同シンポジウムの立看板を見る。中日合同シンポジウムの歓迎振りを見て、やや熱くなる。構内を歩いて、環境与材料工程学院の入る建物に入る。この建物は、1階と2階に机电汽車工程学院が入り、3階の大部分と4階に環境与材料工程学院が入る。建物の入口に、中日合同シンポジウム熱烈歓迎の横断幕が掛かる。建物への階段の所で横断幕をバックに記念撮影。3階の学院長室に徐惠忠学院長を表敬訪問し、持参した土産とパンフレット（農学研究院等概要と農学部ガイドブック）を手渡す。徐学院長は42歳、教授職で、環境与材料工程学院長の他に建材新技術研究所長の肩書をもつ。徐学院長によれば、烟台大学構内の面積は170haで、このキャンパス以外に170haの南キャン

パスがあり、基礎教育と新技術開発に使われている。徐学院長の説明による構内敷地面積、後述の表1に示す郭校長による説明での面積と幾分異なる。

今の中国、大学や研究所を訪問して気付くのは、徐学院長もそうだが、学部レベルの組織の長がいずれも40歳代前半と若いことである。昨2003年8月、中国科学院水利部水土保持研究所附属の固原生態試験場（寧夏回族自治区）を訪問して、若い試験場長と年長の副場長を見て、「学問の進歩と国家方針の進化への組織的対応の狭間で、若い世代の抜擢と苦悩する文化大革命世代を思う。」（江頭、2004）と書いた。中国の文化大革命は1966～1976年の10年間である。その影響をものに受けたのが、現在40代後半から50代前半の人である。50代後半は、苦悩しながらも生き延びた。そして今、文化大革命以後の教育を受け、外国で学位を取ってきた40代前半が、教育研究の実質を握る立場になってきた。10年後、彼らが真のリーダーになった時、中国の教育研究は強くなると思う。

烟台大学は山東省烟台市莱山区に位置し、同市の高度工業開発帯（High-Technology Development Zone）にある。西は黄海に面し、風光明媚、気候は温暖である。烟台大学は1984年の創立で、2004年の今年創立二十周年を迎え、10月6日に記念式典が行なわれた。正門を入った所の芝生に、訪問者にもよく見えるように、二十周年記念式典までの日数を知らせるボードが立っていた。（図3；この写真は9月25日に撮ったもので、この時記念式典まで11日）。背後の時計塔は、大学創立時の建物と思われる。

郭明瑞校長（九州大学では総長に当たる）を表敬訪問するため、環境与材料工程学院の建物から引き返し、管理棟に移動する。管理棟は正門に入ってすぐの右側にある。徐学院長が10時からと思込んでいたため、30分近く管理棟の2階にある半円形の会談室（公楼二楼円庁）で待つことになる。会談室は立派で、果物（葡萄とバナナ）と茶器が用意されていた。環境与材料工程学院事務室の女性（名前は隆さん）が、やかんから茶器にお茶を注いでくれる。茶葉とお湯と一緒に注ぎ、茶葉が沈んだ後飲むタイプのお茶である。

郭明瑞校長との会談には、韓曉玲副校長（第一副校長と聞く）と徐惠忠学院長が同席する。日本側は8人が揃い、韓京龍さんが通訳する。会談室では、郭校長と私が台を挟んで並んで座り、郭校長の横に韓曉玲副校長、私の横に韓京龍さんが座る。徐学院長と日本側7人は、対面する形で回りに円形に並べられた椅子に座る。最初に、郭校長が烟台大学の概要について説明

される。それを韓さんの通訳でノートに写す。この場合、間に郭校長の話が入るので、韓さんの日本語への通訳を書き取るのは非常に楽である。郭校長の説明による烟台大学の概要を、表1に、話された順序で箇条書きに記す。表1には、説明の後の質疑応答を通して入手した情報も記す。

表1の北京大学と清華大学の支援に関して、手持ちの旧パンフレット（2004年4月、徐学院長が九州大学大学院農学研究院訪問の際に持参されたもの）によれば、烟台大学設置の初期の頃、教育省の権限により、2大学から教員と管理スタッフが烟台大学へ派遣され、更に2大学へ烟台大学への長期支援が委託された。旧パンフレットでは、建物面積36万m²、学生総数9千人であり、表1ではそれがそれぞれ2倍弱、3倍弱に増大し、教育組織の拡大が急ピッチで進んでいることが認められる。しかし、専任教員は762人から900人しか増えていず、その結果、学生数に対する教員数の

比率（学生数/教員数比率）、即ち教員1人がカバーする学生数は、旧パンフレットの11.8から表1の27.8へと急増し、教員数として1,200人を用いても20.8と高い。このことは、烟台大学ではマスプロ教育が行われ、教員の教育負担が大きいことをうかがわせ、烟台大学の教育の基本が学士教育にあることを裏付ける。

学生数/教員数比率の過去の調査データを引くと、ハノイ農業大学（越南）7.2、イェン農学大学（ミャンマー）20.4であり（江頭，2003）、これらと比べて、烟台大学の比率は高いと言える。学士教育中心に加え、郭校長は理系と文系の学院から成る総合大学と説明されたけれども、文系のウエイトが大きいのかかもしれない。更に、旧パンフレットの記述では、教員762人のうちProfessor 80人、Associate Professor 364人で、ドクターの学位取得者は42人に留まる。この状況は現在でもほとんど変わっていないと思われる。大学院教育へ比重を移すことに向けては、学生数/教員数比率の

表1 郭明瑞校長の説明による烟台大学の概要。

1. 北京大学と清華大学の支援を受ける。そのため高いレベルの大学となる。山東省の重点大学の一つ。
設立時、万里による指示を受け、改革開放の支点の一つとなる。
2. 大学自身で学生の就職先を決めることができる。他大学は、国家が学生の就職先を指定する。
3. 学生に対する奨学金を最初に支給される。
4. 単位制の教育を最初に実施する。
5. 理系と文系の総合大学。
6. 他の大学より開放的。
7. 国際交流に力を入れ、40の大学と交流協定を結ぶ。学生交流協定締結と単位互換を行う。
8. ここのキャンパスと南キャンパスを合わせて敷地面積は300ha、建物面積は70万m²。
9. 学部学生数は25,000人、教職員は1,700人で、うち900人が専任教師。
10. 大学院の教育へ比重を移す。19の修士点で大学院教育（修士レベル）を行っている。修士点を取るには国の許可が要る。博士点は申請中であるが、実際は他の大学の名前を借りて行っている。
11. 院士は専任1人で、兼任11人。
12. 全国レベルの優秀教員の選任において、100人の中の1人に入る。
13. 留学生は200人で、主に韓国から。
14. 国家統一試験（750点満点）で、烟台大学は基準点を、山東省のレベル（550点）より40点高く、590点に置く。6割以上の学生が600点以上の成績をとる。
15. 研究費を獲得することが業績の一つになる。国からの研究費と民間からの研究費があり、その比率は3:7位。
16. 国家支援科学項目があり、1項目30~40万円の財政支援を受ける。
17. 食品産業が山東省発展の一つの鍵。食品加工産業が山東省の外貨獲得策の一つ。最初の食品関係の研究所を烟台大学に設置する。
18. 山東省では、果樹・果物として、林檎、梨、葡萄、イチゴ、サクランボ、桃の生産。
19. 9. に関連して、学生数の増加に教職員数の増加が追いつかない。教員の数が少ないので、60歳退職後の教員の再雇用あるいは他大学からの教員の兼任の措置を取る。それにより、900人を1,200人教員体制にして教育する。
20. 烟台大学には17学院（学部）がある。17学院を、以下に順不同で示す。
環境与材料工程学院、計算機（機）学院、法学院、光電信息（情報と同じ意味）科学与技術学院、外国語学院、化学生物理工学院、経済与工商管理学院、机电汽車（自動車の意味）工程学院、人文学院、文経学院、国際教育交流学院、職業技術学院、土木工程学院、薬（薬）学院、継続教育学院、体育学院、海洋学院。

適正化と学位取得者の雇用促進が最大の課題となる。

17学院(学部)の名称は、郭校長との会談では教示されず、表1に示すものは、帰国後、韓さんからのメール情報として入手したものである。17学院には、日本の大学に共通する学院と中国独自の学院が見られる。烟台大学では、先述のように、教育組織の拡大・再編、名称変更が進んでおり、教育組織の急激な拡大・再編は過去のパンフレットを不備なものとし、旧パンフレットとの照合ではもう完全にはフォローできなかった。我々の滞在中に、二十周年記念式典用に烟台大学の新しいパンフレットができ上がると聞いて楽しみにしていたのだが、帰国までには結局間に合わなかった。

郭校長の説明の後、私が九州大学と農学系部局の概要について話す。それを韓さんが中国語へ通訳する。その後、相互に質問と回答を繰り返す形で、11時半過ぎまで1時間以上、時々笑いはさみながら、また果物を口にし、お茶を飲みながら、会談は和やかに進んだ。会談の後昼食に招待され、会場まで構内を歩く。ちょうど昼休みと重なり、学生が講義用の建物からどつと出て来る(図4)。物凄い数の学生が次から次と、

まさに蜘蛛の子を散らすようにという形容がぴったりである。途中で学生寮を見る。くの字形の6階建ての寮が2棟並んで建つ。この日以降も、構内のあちこちに新・旧の学生寮を見た。烟台大学は全寮制で、構内の寮に入れない学生には学外の寮が宛がわれる。

昼食会場の外国人/留学生用建物は海の近くにあった。一旦前を通り過ぎて、やや奇抜な形の門を見て、門外に出て海を眺めて会場に戻る。昼食用の部屋は個室になっており、そこに丸テーブルが備えられる。歓迎昼食は12時20分から、韓副校長、徐学院長、隆事務員が同席して始まり、歓待される。料理は海産物が中心で、海鼠のスープから始まる。アルコールは烟台クーニャンから始まり赤ワインと続く。乾杯を繰り返し、昼間からしたたかに飲むことになる。

烟台市

昼食後一旦ホテルに戻り、着替えて街に出る。先ず第6回国際果蔬博覧会に行く。林檎を中心に果物が展示される。果物の他山の幸(茸など)が展示され、各単位(ブース)が趣向を凝らして展示する。今回で中



図1 烟台市, 華安賓館.



図2 朝食 at 華安賓館併設食堂.



図3 烟台大学 (1).



図4 烟台大学 (2).

国訪問は9回目になるが、最初の頃の「売ってやる」から「買っていただく」への意識の変化を感じる。商談の気はないので、見て回るだけになる。それでも1個所、日本語を話す人のブースがあって、そこでは会話の様子をカメラに撮られる。博覧会会場を出た所で、偶然韓京龍さんの長兄に会う。韓国系の食品会社の社長と一緒にあった。

烟台市の中心部へ行き、スーパーと思しき建物に入り、龍井緑茶と月餅を買う。9月28日の中秋の名月を前に、様々な月餅が売られる。このスーパー、食品や雑貨等の売り場へは荷物や袋類は持ち込めず、ロッカーに預けることになる。人を信用しない中国をここでも見る。午後のプログラムには、午前中の授業を終えた金福順さんも加わる。バスでホテルに戻り、昼食の酒が効いてか暫らく仮眠する。烟台市のバス料金は距離に関係なく、1人一律1元。午後6時45分にホテルロビーに集まって夕食。金福順さんと韓喜玲さんも加わり、ホテル2階の個室で、内輪だけの和やかな夕食と

なる。アルコールは烟台ビールのみで済ます。

中日合同シンポジウム

24日(金)、7時半に集合して朝食。朝食はホテル2階の個室に用意され、中日合同シンポジウムの中国側主宰者である中国農業科学院農業環境与可持続発展研究所の3人も同席する。食事の前、名刺を交換する。3人は、梅旭栄(栄、正しくは草冠)所長、李玉中研究員と王慶鎖副研究員で、いずれも博士の学位を持つ。中国農業科学院農業環境与可持続発展研究所は北京市にあり、梅所長は、昨夜午後11時頃烟台に着いたと話す。中国農業科学院は、12月24日、同科学院の農業資源与農業区画研究所との学術交流協定等調印で訪れることになる。

8時半にホテルロビーに集まり、烟台大学構内を歩きながら、「農林業・環境科学に関する中日合同シンポジウム」会場へ向かう。合同シンポジウムのプログラムについて、講演者・所属・発表課題を、講演順に

表2 中日合同シンポジウムのプログラム。

講演者	所属	発表課題
江頭和彦	九州大学 大学院農学研究院	土壌学からみた環境問題の概念 (Concept on environmental problems from the viewpoint of soil science)
韓 京龍	烟台大学 環境与材料工程学院	Elucidation of tea rhizosphere and environmental pollution improving mechanism with "pneumatic deep layer fertilization method" applied in tea garden soil
矢幡 久	九州大学 熱帯農学研究センター	半乾燥地の造林技術開発と水分動態・生長予測 (Development of forestation technology and water regime and growth simulation)
宋 建国	烟台大学 環境与材料工程学院	土壌微生物態窒素の生物有効性研究 (Study on soil easily mineralizable nitrogen and microbial biomass nitrogen for biological availability index)
松元 順	鹿児島県 農産物加工研究指導センター	笠野原シラス台地における硝酸地下水汚染 (Pollution of underground water by nitrate in the Kasanohara Shirasu Plateau)
王 慶鎖	中国農業科学院 農業環境与可持続発展研究所	我国草地的退化与治理対策 (Degradation of grassland and conservation practice in China)
橋本俊二郎	中村学園大学短期大学部	中国および日本における食料事情について (Food status in China and Japan)
羅 新生	烟台大学 環境与材料工程学院	防洪工程与海河平原水資源短缺 (Flood control works and water resources shortage of Haihe plain)
馬場俊幸	九州大学 大学院生物資源環境科学府	日本における土壌汚染の歴史と法規制の現状 (History of soil pollution problems and related laws in Japan)
趙 玉平	烟台大学化学生物理工学院 食品研究所	降解山楂汁中檸檬酸酵母の篩選及其降酸特性研究 (Study on the selection of yeast for decomposition of citric acid in hawthorn fruit juice and its deacidification characteristics)

表2に示す。合同シンポジウムの主題「農林業・環境科学」の提唱は私であり、日本側出席者の顔ぶれをみて考える。発表は双方から5人ずつで、中国側は烟台大学から4人、中国農業科学院農業環境与可持續発展研究所から1人が話す。このように中国側講演者の主体は烟台大学でありながら、烟台大学には合同シンポジウムを主催するだけの力がまだないということで共催に回り、主宰者は、中国側は中国農業科学院農業環境与可持續発展研究所、日本側は九州大学大学院農学研究院となる。この認識、我々にはやや理解し難く、烟台大学としても悔しいだろうと思われるが致し方なく、中国の高等教育研究機関における序列・格付けの厳しさを見る。日本側5人の発表は、表2の発表課題に示すように、シンポジウムのテーマに対応して、多彩な内容となっている。

合同シンポジウムのプロシーディングス「“中一日農林業・環境科学” 学術検討会論文集」は開催に間に合い、当日会場で配布される。プロシーディングスの作成には、韓京龍さんの尽力が大きい。しかし、中国側、プロシーディングスに載っているけど発表はなかったり、逆に載っていないけど発表と、様々な対応であった。やはり大陸、中国人のおおらかさと解釈したが、やや信頼性に欠ける点、烟台大学による国際会議の開催・運営にはまだもう少し時間がかかるかもしれない。当初は英語による発表を想定し、プロシーディングス原稿を私と松元は英文で作成し、矢幡教授は英文の要旨をつけて送っていた。訪問間際になって韓さんから連絡が入り、中国側出席者の多くが英語を理解できないということで、中国側は中国語、日本側は日本語で発表することに決め、そのため、私はあわてて日本語のOHPシートを用意することになる。更に発表会場で、通訳は日本側の日本語による発表と質問のみとし、中国側の中国語による発表は通訳しないことに決める。ついでながら、発表媒体としてOHPシートを用いたのは私だけで、残りの9人は全てパワーポイントを使う。一人世界から取り残されていく思い。

中日合同シンポジウムは、総合楼4階で行われる。総合楼は主に学生の授業に使われているらしく、楼の前の広場には一面に自転車が置かれ、それが整然と並べられている(図5)。合同シンポジウムよりも授業が優先されるらしく、シンポジウムは、午前中は408教室で行われ、午後はそのが授業に使われるため、同じ4階の404教室に移る。9時前に会場の408教室に入ったところ、既に半分以上の椅子が埋まり、その大半が環境与材料工程学院の学生のものであった。9時ちよ

うどにシンポジウムは始まり、先ず、日本側と中国側の代表者が紹介され、歓迎の拍手を受ける。紹介するのは韓京龍さん。続いて中国側代表者(梅所長)、日本側代表者(江頭研究院長)、烟台大学崔明德副校長、徐恵忠環境与材料工程学院長の順に挨拶する。双方母国語で挨拶し、韓さんがそれを通訳する。私の挨拶の中で、「昨日、郭校長と韓副校長にお会いして、親しくお話する機会を得ました。郭校長のお話に、今後にかける烟台大学の意気込みを感じました。」に続いて、「また、学生さんの顔に明るさが見えるのも、烟台大学の将来を感じます。」という一文を韓さんが通訳したところ、出席の学生の間に笑いが起こったので、気持ちを通じたと思う。徐学院長の挨拶の中で、環境与材料工程学院の学生総数は960名、教員は41名でうち教授は4名と聞く。

挨拶が予定より早く終わり、暫らく休んで、9時50分より午前部の部の発表に移る。発表時間は質問も入れてひとり25分であり、日本側は通訳が入るので、発表時間は実質その半分となる。午前部の間、山中さんと窪田さんは、烟台大学における学務・学生管理等について聞くため退出する。午前中の通訳は、韓京龍さんが担当する。午前中の5課題の発表はほぼ予定通りに進行して12時には終了し、終わって昼食会場に向かう。中国では、シンポジウムのレベルはさておき、どこの大学、どこの研究所でも食事を大事にする。このことは、一面私にとっては嬉しいことである。昼食会場への構内の通りに沿って新しい建物が並び、建設中の建物も見える(図6)。創立二十周年を迎え、構内敷地と建物の整備が進み、表面的には今まさに躍進の烟台大学である。

昼食会場は大学内の第六餐厅宴会庁で、ここは1階がセルフサービスの学生食堂で、2階に接待用の個室が廊下の両側に並び、韓さんの話では、第六餐厅宴会庁は、大学人と関係のある民間人の経営によるとのこと。昼食のテーブルには、日本側の7人、中国側主宰者の中国農業科学院農業環境与可持續発展研究所の3人、烟台大学の崔明德副校長、徐恵忠学院長、王徳父(父、正確には間に点が付く)副学院長、韓京龍さん、李さんが着き、総勢15人で、賑やかな宴席となる。魯菜の料理はおいしく、また烟台クーニャンによる乾杯を繰り返し、午後1時半過ぎまで、たっぷり1時間以上の昼食となる。李さんは外国語学院の日本語教師と聞き、午前中、山中さん、窪田さんと烟台大学関係者との面談を通訳する。烟台大学によるこの面談の設定と面談への心配りに、さすが孔子を生んだ魯の国、人々

の心に流れる儒教の精神を想う。松元祥子さんは、午前中、金福順さんの日本語の授業にゲスト出演する。

午後も5課題の発表。午前中は梅所長の司会であったが、午後は王副学院長に交代する。昼食の烟台クーニャンが効いたのかと、下種の勘繰りをする。通訳も、金福順さんに代わる。午後の発表は、それぞれの話が長くなり、午後2時の開始が15分程遅れたこともあって、午後5時過ぎまで1時間近くオーバーする。最後に、梅所長がうまく総括して、中日合同シンポジウムを締め括る。合同シンポジウムでは、最後の山楂子の食品化学的研究発表を除いて、各課題2ないし4つの質問があり、発表毎に、必要に応じて通訳を通して、熱心な質疑応答が繰り返された。学生からの質問も多く、発表が進むにつれてその傾向が強くなる。馬場さんの発表に対して、1人の学生から、「そのような法律を作って守られるのか」という質問があった。「上に政策あれば下に対策あり」の中国の格言が、良きにつけ悪しきにつけ、学生層にまで浸透していることを思う。しかし、やや手作りの感は否めないとしても、今回の中日合同シンポジウムが、いささかでも、烟台大学の若い学生諸君の学術的刺激になり、知的好奇心を高め、国際感覚を増したとすれば、それが最大の喜びである。

合同シンポジウム終了後の夕食は、中日合同でパーベキューでもどうだろうかとの話しになったが、日本人が腹をこわすことへの恐れとお互いに気を遣わないほうがおいしいだろうと、結局分かれて取ることになる。韓さんを入れて8人、街に出て、ホテルから歩いて行ける所、韓さんが家族でよく行くという韓国料理店に行く。歩きながら、ハンガルの看板をあちこちに見る。朝鮮族に加え、韓国から来た人も多いそうである。韓国料理店では、羊の串焼きに始まりビビンバと冷麺で終わる。食卓に多くの皿が並び、色々と食べ、烟台ビールと韓国焼酎（真露）を飲む。ホテルへの帰途、萊山区設区十周年の演芸会を見る。広場に舞台が仮設され、すごいマイクのボリュームで歌い、踊っている。公安の粋な計らいで、それを舞台正面から見る事ができた。暫し楽しんで、午後9時過ぎには華安賓館に戻る。

住居と日本語クラス

韓京龍・金福順夫妻について記す。衣食住は生活文化の基盤として、私は大いに関心があり、同じ漢字文化圏にありながら、我が国と韓国、中国、越南の人々の間には、衣食住の感覚にかなりの違いが見られる。

その観点から、韓さん夫妻には申し訳ないけれども、その住居について書かせていただく。韓さん夫妻は集合住宅の7階に住み、住居代は大学が負担する。7階まで登る階段は天井が低く、段数が少ない。部屋は、床は全室フローリングで、玄関で靴は脱ぐけど、日本の家と違い、玄関と居室の部分のはっきりとした境界は無い。間取りは、12畳程のダイニング・リビング、10畳の夫婦寝室兼書斎、8畳の子供部屋と3畳程の多目的部屋。これに、バス・トイレと洗面所が付く。バスは、バスタブが無くシャワーのみ、バスタブが無いのは華安賓館と同じで、中国の人に共通するのかもしれない。因みに、烟台市内を走りながら、洗浴中心の看板をよく見かけた。日本の銭湯に当たると聞く。これまでの中国訪問では余り目にしなかったけれど、その地理的位置から烟台市に特徴的かもしれないし、あるいはここ数年全国的に増えているのかもしれない。いずれにせよ、中国人の家庭にバスタブが無いことの一つの現れであろう。

ダイニングには食事用のテーブルは見えず、簡易な丸テーブルが置かれているのみ。お茶は飲めるけれど、家族揃っての食事は無理。食習慣の違いで、外食を常としているのか、あるいは家族で食べる時は、越南红河デルタの農家でも見たが、莫産の上あるいは床に直接食器を並べて食べるのかも知れない。リビングのテーブルも小さく、パソコン関連機器が置かれ、本が積まれる。冷蔵庫はアメリカ並の大きさと、リビングに置かれ、冷蔵庫の横に20L用の水サーバーが置かれる。ベッドのサイズは大きく、クッション性はほとんど無し。衣類はクローゼット収納で、整然としている。中国では内装は住人が自ら行うとのことで、先の住人が壁紙等丁寧に仕上げている。カーテンが無く、周囲とはお互いに丸見え。このことは、中国女性が足を開いて座ることにそれほどのこだわりを感じていないように見えること、また服に裏地が無いことと一脈通じるものがあると思う。韓さん夫妻は、現在新たな家（集合住宅）が建築中で、何階の部屋にするか、内装をどうするのか思案中である。

烟台大学外国語学院の日本語コースには、金福順さんと王さんの2クラスがあるようである。ただ、山中さん、窪田さんと烟台大学関係者の面談を通訳した日本語教師は李さんと聞いた。李さんではなく王さんだったのかもしれないし、あるいは2人で1クラスを担当しているのかもしれない。松元祥子さんが参加した日の授業について、松元祥子さんからの聞き取りを基に記す。その日の授業には40名位が出席し、そのうち男

子学生は3名で、圧倒的に女子学生が優勢。日本語を選択した理由は興味が中心で、日本留学については漠然とした希望しかもっていない様子。当日は、まず松元祥子さんが自己紹介をし、その後受講生からの質問を受け、それに松元祥子さんが答える形で進められた模様。質問の内容は、日本の食事、有名大学、現在の流行（ファッション、音楽等）、烟台に対する印象等雑多。学生の質問の時、金福順さんが発音等について修正・指導を行い、特に「ラ行」の発音法を徹底して指導した。日本人が「r」と「l」の発音指導を受けるのと逆である。松元祥子さんの印象では、学生の「助詞」の使い方に不的確さが目立ったとのことであった。

専門家学座談会

25日（土）、朝7時半に揃って朝食。中国側代表3人も同じホテルに泊まっているので、昨日と同じく2階の個室での朝食となる。品数も多く、毎日豪華な朝食だと思う。中国側、昨日は同席して名刺を交換したが、昨夜の酒が残っているのか、今朝は現れず。8時45分にホテルロビーに集合して烟台大学へ行く。松元祥子さんは、今日も金福順さんの日本語のクラスに出席する。我々は、9時から公楼二楼庁で、烟台大学の専門家学者との座談会の予定であったが、建国記念日（10月1日）に向けて、27日から1週間大学は休みになり、休みの分をカバーするため今日の土曜日に急遽授業が組まれたとかで、予定していた専門家学者の多くが結局来れなくなり、環境与材料工程学院の少数の教員との懇談となる。

徐恵忠学院長、韓京龍さんの他、出て来てくれたのは、蘇宏教授、宋建国博士と羅新正博士の3人。途中もう1人来てくれたがすぐにまた出て行ったので、名

前を韓さんに聞く余裕はなかった。3人のうち宋博士と羅博士は24日の中日合同シンポジウムで発表しており、話題は自然とそちらに向き、発表内容をきっかけに1時間強（9時15分～10時20分）懇談する。烟台大学側には共同研究の意識が強く、畑作物の施肥法や地下水の硝酸態窒素汚染対策についての共同研究の申し出があり、今後両大学と日本の自治体を含む幅広い体制で検討を続けることとした。蘇教授は環境工程、微生物による污水处理を専門とすると聞いたが、懇談には至らなかった。懇談を通して得た、烟台市の土地利用断片を、簡条書きに表3に記す。

懇談を終えて環境与材料工程学院に移動し、10時30分から11時過ぎまで、建物3階の学生実験室（環境実験室、微生物実験室、水処理実験室）、機器分析室を見て回る。環境与材料工程学院、スペースは充分で分析機器も整備されつつある。あとは人材を揃えることである。ホテルに戻るグループと別れて、11時過ぎから、大学構内を見て回る。広大なキャンパス、新築の巨大な建物（図7）、学生の多さに圧倒される。創立時の赤を基調とした建物と新築されたばかりのブルーを基調にした建物が好対照である。図8は、手前から、海洋学院、外国語学院、薬学院、環境与材料工程学院/机电汽車工程学院の建物が並ぶ。これら学院の新築の建物が並ぶ様はまさに壮観である。それぞれに独立した建物ながら、全部が3階部分で、端から端まで数百mに及ぶ廊下でつながっている。

歩きながらの韓さんの話では、中国では大学によって授業料が違い、大学でも専門毎に授業料が違う。授業料は半期毎に納める。烟台大学の授業料は、半期で3,000～5,000元であり、授業料の幅は専門による違いを表す。

表3 烟台市の土地利用断片。

1. 土地利用

森林が30%で、耕地が70%。森林は白樺。耕地は果樹園と畑で、その比率は果樹園2、畑1の割合。水田は無い。果樹園には、有機質資材（豚・鶏の排泄物、人糞尿、収穫残渣）が施用される。

2. 畑作

畑作の行われる標高は10m程度で、夏に玉蜀黍、秋に小麦が栽培される。年間に尿素として350kg/haの窒素（N）が施用される。年間の窒素の利用率は40%未満。農業用水、都市用水、工業用水にいずれにも地下水を使うため、地下水までの深さが5mから15mに低下する。

3. 無機態窒素濃度

小麦畑、表層から20cmの深さでの土壌中の硝酸イオン濃度は20～30mg/kg。

地下水中の硝酸態窒素濃度は、深さ1mで2mg/L。

小麦畑、土壌中のアンモニウム態窒素濃度は10mg/kg。



図5 烟台大学 (3).

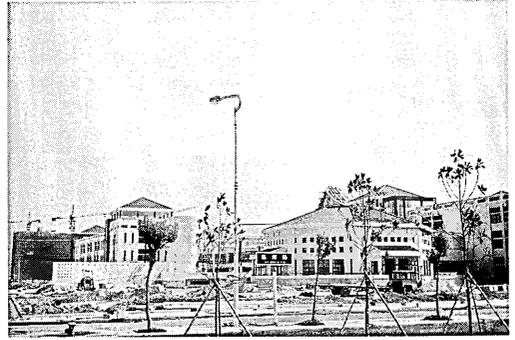


図6 烟台大学 (4).



図7 烟台大学 (5).

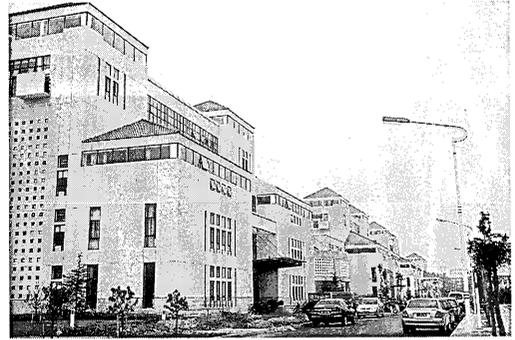


図8 烟台大学 (6).

烟大市場

韓国料理店での昼食の後、韓さんは統計学の授業(45分授業-15分休み-45分授業)に行き、代わりに金福順さんの案内で、午後2時からホテル近くの烟大市场(Yanda market)を見に行く。烟大市场では、先ず水果(果物)市場を見て、水産市場はやや素通りして、野菜市場を見る。果物は、現地で生産される物の他、越南から輸入された竜眼(ロンガン)や新疆からの哈密(ハミ)瓜などが混じり、魚介類は近海物や淡水魚を中心に豊富で、魯菜の本場を思わせた。野菜は、ほぼ現地生産と思われる。

果物として売られていたのは、野帳での記載と写したスライドから見て、竜眼、ドラゴンフルーツ、バナナ、キウイ、マンゴー、哈密瓜など輸入・移入物の他、西瓜、葡萄、林檎、梨、桃、柿、柑橘、杏、石榴、棗、山楂子、トマトなどであった。葡萄は数種が売られていた。林檎は紅富士で、日本から持ち込まれた品種であり、林檎を詰める箱には「アップル」とカタカナで書かれ、日本への輸出用の箱と思われた。棗は、越南では「越南林檎」と呼ばれて紅河デルタで広く栽培さ

れており、あるいは越南からの輸入品かもしれない。山楂子(サンザシ;中国語では山楂)は酸味が強く、24日の中日合同シンポジウムで、烟台大学化学生物理工学院食品研究所の趙さんが、酵母を用いた発酵による脱酸についての研究を発表していた。

野菜については、写したスライドから、大根、人参、サツマイモ、ジャガイモ、玉葱、茄子、トマト、葱、ピーマン、胡瓜、冬瓜、糸瓜、キャベツ、白菜、カリフラワーなどが売られていたのを確認した。豆はササゲと見たが定かではない。勿論スライドに写していなければ見逃しており、写していたとしても見間違いや見ても名前のわからない物もある。特に葉菜類にわからないのが多い。野菜は区画に分かれて売られ、区画毎に番号が付いている。販売する人は、恐らく一区画幾らで買うのであろう。野菜市場は、時間帯もあつたろうが、我々以外に客は無く閑散としていた。穀類は野菜市場で売られていた。その時はどれがどれだかわかったのだが、帰国後写したスライドを見ても、挽き割りの玉蜀黍、モチ米、ジャポニカウルチ米、緑豆、高粱などがあつたのはわかるのだが、どれがどれだかはもうわからない。穀類売り場の雰囲気を楽しむだけ

である。野菜では、逆に、こんなのも売られていたのかと、スライドを見て初めて気付く物もあった。

丘陵部の土地利用と退耕還林

一旦ホテルに戻り、韓さんが授業から帰るのを待って午後4時に集合し、烟台大学へ行く。車を手配してもらい、4時半から、徐学院長自らの運転で、烟台市の内陸に入り、台地と丘陵地の土地利用を見に行く。結果的には面白い巡検となり、せめて午後の半日程をかけてもう少しじっくりと見て回りたかったと、やや悔やむ。烟台大学を出て暫らくは台地（低位）を走る。地形はゆるやかに起伏し、畑作物、果樹、苗木が生産される。畑作物は、午前の専門家学者座談会で聞いたように玉蜀黍が多く、加えて野菜が作られる。川は少なく、あっても小さく、水量はわずか。地下水が、飲料水や農業用水の主要な水源であることを確認する。農家は赤瓦で煙突が立つ。烟台周辺の年降水量は1,000mm、今年は多く2,000mmを超すと聞く。

台地（低位）から丘陵地（高位）へ上る。山東省は主として山地/丘陵地から成ると、案内役の徐学院長

から韓さんの通訳を通して聞く。丘陵地の母材は花崗岩で、ガリがひどい。ここで、ガリは侵食の度合/状態を表す用語で、侵食の進行につれて、地形変化を伴いながら、リル→ガリ→スティームバンクと移る。ガリは後で図9に示すように、土壌が深く抉られて、もはや人力では修復不可能になり、修復には機械力を必要とする状態を言う。スティームバンクまで進むと、機械力でも修復不可能となり、その極端な例は、黄土高原に見ることができる（江頭ら、1999；江頭、2004）。

車を降りて地形、土地利用を見る。丘陵部の土地利用の一例を図9～12に示す。場所は烟台市萊山区解家庄鎮、遠くの谷間に集落を望む。図9は、丘陵地の地形とガリの発達した状態を示す。図10では畑がテラスに造られ、作物は収穫跡と思われる。図11では、わずかな平坦地にタロ（サトイモ）とサツマイモが栽培され、その間の窪地には果樹が植えられる。図12は、テラスの縁に植えられた林檎の木を示す。実が数個成り、赤く色づき始めている。

山東省の丘陵地では退耕還林が進む。退耕還林して果樹（主に林檎）を植える。退耕還林は政府の方針で

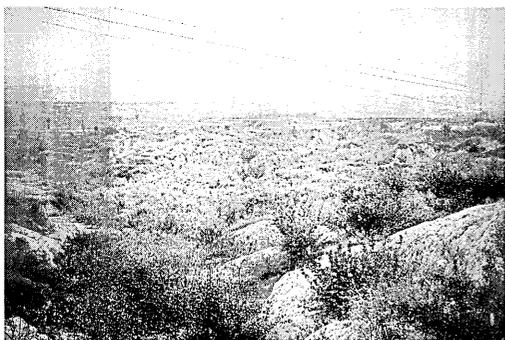


図9 丘陵部の土地利用 (1).



図10 丘陵部の土地利用 (2).



図11 丘陵部の土地利用 (3).



図12 丘陵部の土地利用 (4).

強力に進められ、昨2003年8月の黄土高原でも押し進められているのを見た(江頭, 2004)。山東省では、退耕還林すると、10年間補助金が出ると聞く。丘陵地の土地利用調査で見たように、土壌の母材は花崗岩である。花崗岩に由来する土壌はマサ土と呼ばれ、粗粒質で砂分が多く、容易に水食(降雨など水を営力とした侵食)を受け、流出する。畑作物の栽培では、特に生育初期、作物による土地被覆率が低く、土壌は降雨に直接晒され、水食を受け易い。一方、果樹園では相対的に土地被覆率が高く、畑作物に比べ水食を受けにくくなる。侵食防止や土壌保全の観点からも、退耕還林の推進は望ましいことと言える。

山東省での退耕還林策は10年前より進められ、玉蜀黍/小麦が主に林檎に代えられる。玉蜀黍/小麦の林檎への転換は徐々に進められ、土地利用の写真を撮った所から下って観察した場所では、林檎の木がまだ小さく、木と木の間に畑作物が植えられていた。林檎の木が小さいうちはその間に玉蜀黍/小麦を植え、林檎と玉蜀黍/小麦の間作あるいはアグロフォレストリーとして利用し、林檎の木が大きくなると、林檎だけの栽培に切り替える。タウンヤー方式と呼ばれるアグロフォレストリーで、1998年1月ラオス、ルアンパバーンのLao-IRRIプロジェクトで、チークの間に陸稲/ヒヨコマメが植えられているのを見た(江頭, 1999)。山東省では、30度以上の傾斜地ではほぼ100%が退耕還林される。退耕還林率は30度以下の傾斜地では約70%、平地では低いと、徐学院長から聞く。観察した退耕還林の作付状態をカメラに収めたかったのだが、既に夕闇が迫り、断念せざるを得なかった。中国の農村は日が暮れると一気に漆黒の闇となる。その暗がりの中で人が働き、道を歩き、自転車で行く。それらが一瞬車のライトに照らし出される。帰りの道を間違え、その分幾らか手間取り、午後7時20分華安賓館に帰り着く。徐学院長に丁寧に礼を述べて別れる。

夕食は、タクシーで烟台市の中心部に出て海鮮料理を食す。金福順さん、松元祥子さん、韓喜玲さんは別行動となる。烟台市の中心部へは海沿いの道进行。烟台市の中心部は高層ビルが立ち並び、ライトが光り輝く。数時間前の農村の漆黒の闇とは好対照である。午後の半日で、中国のもつ現実、光と影を垣間見る。海鮮料理は素材を選び、それを調理してもらい、冷えた青島ビールと烟台クーニャンを飲み、十分に食べて、費用は8人で350元。日本円で4,500円程。しかし、貧困層の月収をはるかに超すであろう。

集合住宅

26日(日)、朝7時半から朝食。今日もホテル2階の個室での朝食となる。烟台クーニャンのマークの付いたグラスを土産に所望する。昨日の専門家学者座談会の時に頂いた林檎を係りの女性に切ってもらって試食したが、固くて、酸味も甘味も足りないという印象をもつ。8時半に大学借上げのマイクロバスでホテルを出て、蓬萊閣観光に行く。日曜日ということで韓喜玲さんも同行し、総勢10人。蓬萊閣は、ホテルから西北に65km程の距離。蓬萊閣までの途中、沿海部の土地利用と土地開発を観察する機会を得た。ホテルを出て山側の道を烟台市中心部に向けて走る。そこを過ぎ、街並を見て走る。新しい集合住宅と古い集合住宅の様が好対照である。新しい集合住宅は住み易いとしても、古い集合住宅にはその土地土地の趣がある。歩くなら古い街である。街路樹はプラタナス。道路沿いの小さな商店に入り、水を購入する。真新しい南山隧道を過ぎて、片側3車線の道路を走る。緑地帯を挟んでバイク・自転車用の車線、その外側に歩道、ナトリムランプの街灯。烟台市を走っていて、インフラ、特に道路の整備振りには驚くばかりである。道路が広いだけでなく、充分の緑地帯が確保されている。

烟台市の古い街並の一つに入る。古い集合住宅は、三方に面した広いガラスの出窓があり、洗濯物が下がる。出窓のガラスは青色と無色。元来は青色であったものが、壊れる度に無色のガラスに変わっていったと思われる。青色のガラスは紫外線避けのために、その効能のほどは分からないけれども、新しい集合住宅の窓ガラスは全て無色。古い集合住宅は6階建てで、1階部分は食堂や商店になっている。古い集合住宅を残しながら、新しい集合住宅が建設される。その一方で、古い集合住宅を壊して新しい集合住宅の建設が進む。この街もすぐに大きく変貌するだろう。

沿海部の土地開発と土地利用

火力発電所(烟台発電)を横に見て、烟台市の萊山区から福山区に入る。烟台市には5つの区がある。福山開発区の傍を過ぎる。新しい建物が整然と並び、詳しく観察する間もなく通り過ぎるが、感嘆の一言である。こういう中国を見ると、どうして日本からの援助が必要かと思うけれども、昨日の農村を思い出すと、また複雑な気持ちになる。道路(一級道路)は片側5車線になる。道路の整備を待って、土地の造成と建物の建設が進む。広大な葡萄畑が広がり、醸造所(張裕

酒造)の邸宅が見える。農家は赤瓦の平屋となる。玉蜀黍畑と苗木畑が広がる一方で、土地造成が進む。片側5車線の道路から山側に入る道が幾つも造られている。造成区を囲む形で道路が造られているのであろう。この地域の開発はこれから急速に広がり、数年後には工業団地が形成されて、全く変わった景観になるだろう。凄じいの一言である。

図13~16に、土地開発の事例を示す。いずれも、烟台市福山区で撮ったものである。図13は片側5車線の道路を示す。道路の蓬萊市に向かって左側(陸側)では土地造成と建物建設が進み、道路の右側(海側)には赤瓦の住居が見え、雑木林が残る。図14は、道路の陸側で進む土地造成と建物建設を示す。図15は道路海側の耕地であり、玉蜀黍の栽培が見える。図16には、赤瓦の平屋の住居群を示す。住居は、道を挟んで両側に、道に直角に並んでいる。写真に見るように、烟台市福山区での土地開発・土地造成・建物建設は道路の陸側で主として進められ、道路の海側は専ら耕地としてまたは荒地のまま残され、赤瓦の住居群が点在した。このことには地形的要因が大きく、陸側の標高が高いためと思われる。

蓬萊市に入る。道路の両側に玉蜀黍畑が広がり、片側5車線の道路は、畑地を切り裂く形で造られたと思われる。料金収集所(蓬萊パーキングエリア)の建物は建設中。道路はわずかに起伏する。小さな市が立つ。アジアを思わせ、ここまで所々で見てきた。道路の海側に広い葡萄畑を見る。葡萄の標準モデル圃場と、韓さんから聞く。図17は、道路の陸側に最近造成されたと思われる広大な葡萄畑を示す。烟台市では赤葡萄酒が飲まれ、葡萄酒の原料に使われるのかもしれない。道路はまた平坦になり、林檎園と玉蜀黍畑。林檎はたわわに実り、林檎園の奥には農家群。道路の陸側に葡萄園。そのずっつと奥には建設中の集合住宅。葡萄園に続いて林檎園。このように、蓬萊市に入ってから道路沿い(沿海部)の土地利用では、林檎と葡萄と玉蜀黍が主な農作物であった。図18には林檎園、図19には葡萄園、図20には林檎と葡萄と玉蜀黍の栽培を示す。昨日の丘陵地でも今日の沿海部でも、水田あるいは稲の栽培は全く見なかった。

10時20分に片側5車線と別れて側道に入る。道の両側には林檎園と野菜畑と玉蜀黍畑と赤瓦の農家群が展開し、やや安らぎを覚える。しかし、それも束の間、5分程で片側3車線の道路に入る。蓬萊の文字がやたらに目につく。道路に沿って製造業の工場が並ぶ。いずれも新しく建てられたばかりのように見える。建設

中の建物も見える。蓬萊開発区ではないかと思う。昨日の午後から今日にかけて見た、激しく移り変わり発展する沿海部と停滞し取り残される内陸部の対照は、中国の縮図を見る思いであった。

蓬 萊 閣

沿海部の土地開発の興奮が覚めやらぬうちに、10時40分、八仙人が海を渡った所と伝説に伝えられる場所(八仙渡海口)を見て、遠景をカメラに収める。その前を過ぎ、蓬萊閣観光の基点となっている広場(駐車場)に着く。この辺り一帯は、蓬萊閣を中心に、ウォータースタンプとして一大観光地になっていると思われる。広場の端には土産物店が並び、人を呼び込む。入場券売場で、蓬萊閣巡りの入場料が基本は90元と聞き、いかにも高いと判断して入場しないことにする。その代わりに、モーターボートに乗り、海上から遊覧する。費用は10分間の乗車で1人20元。1隻のボートに5人ずつ乗る。我々のボートは日本人ばかりで、モーターボートの運転手が時々ボートを停めて親切に説明してくれるのだが、中国語のため皆目分らず、海上から普照樓と賓日樓、蓬萊閣を拝むのみ。ボートを降り、街中を歩いて見て回る。説明文によれば、蓬萊閣は古代中国四大名閣の一つに挙げられ、その歴史は古く、1061年宋代の建築と言われる。ボートから降りて聞いた話では、モーターボートで進んだ先に黄海と渤海の分岐点があり、更に60元を払うと、分岐点まで連れて行ってくれたことのようなのである。黄海に注ぐ川と街の佇まいをカメラに収める。街の住家は清代の建築と思われる。海鮮料理と麵の昼食の後、午後2時帰途に着く。

来た道を戻る。来る時には見えなかったものが、二度目の帰りには見えてくるようになる。先に示した図13~20の写真は、いずれも帰り道に、所々で車を降りて撮ったものである。午後3時烟台市福山区に入る。3時30分片側5車線の一級道路から離れ、3時40分烟台発電の横を通り、45分居住文化成熟社区を通って烟台市街に入る。数個所で思い思いに買物をして、6時30分ホテルに帰着する。私は、山東雪青茶と烏龍茶を買う。烟台市内での買物には、金福順さんの日本語クラスの二人の女子学生が途中から合流する。一人は黒龍江省の齊齊哈爾(チチハル)の出身で、もう一人は烟台市の出身。二人とも名前を聞いたのだが、紙に書いてもらわなかったのでその時は聞き流し。帰国後松元祥子さんから、黒龍江省出身の女性は宋灵輝さん、烟台市出身の女性は刘静さんと聞く。烟台大学の日本

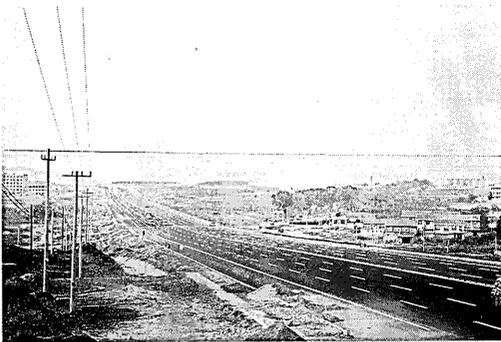


図13 沿海部の土地開発 (1).

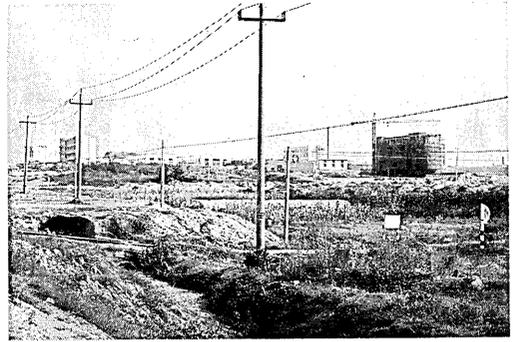


図14 沿海部の土地開発 (2).



図15 沿海部の土地開発 (3).



図16 沿海部の土地開発 (4).

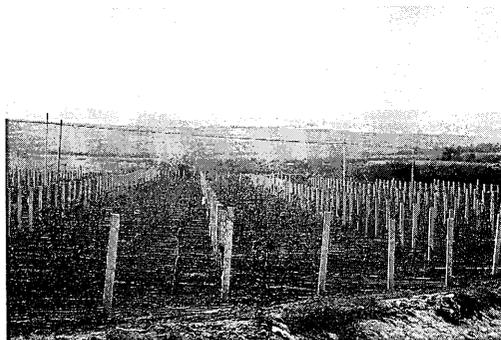


図17 沿海部の土地利用 (1).



図18 沿海部の土地利用 (2).



図19 沿海部の土地利用 (3).



図20 沿海部の土地利用 (4).

語クラスは2003年9月から始まり、彼女ら2年生が一期生になる。二人とも素直で純真で活発で、日本語はまだ覚えられないものの、健康がはちきれそうなお嬢さんであった。

午後7時30分より、ホテル近くの程家酒樓で歓送の宴。徐学院長も出席される。その前、華安賓館のロビーで、今回の訪問の成果を謳った覚書に徐学院長と二人調印する。食事は中華料理、酒は烟台クーニャンからビール。中国では、濃い酒から薄い酒へもっていくとは徐学院長の話。私は最後に草原情歌と博多祝い節を歌い、十分に堪能した。

烟台—青島—福岡

27日(月)、帰国の日である。烟台はこの時期朝5時半頃には明るくなり、人々が動き出す。6時半からの朝食を済ませ、足掛け6日間過ごした部屋に別れを告げ、荷物をロビーまで下ろす。金福順さんの見送りを受け、7時33分マイクロバスでホテルを出立する。烟台市内の一級道路、片側4車線、両脇に充分な緑地帯を取る。7時45分南西方向に向きを変え、一路青島を目指す。道路に沿って中国石化のガソリンスタンドが多い。私はバスの進行方向右側の座席に座り、道路の両側に展開する土地利用を眺め、道路沿いに売られる果物を見る。7時50分左側にキョウ(侠の人偏が無い字)河を見る。水量は多い。暫らく右側に汽車の線路が並走する。ポプラの街路樹の並木が続く。8時22分右側に桃村新天地の建設中を見る。8時33分ホテルを出て1時間、ここまで見た作物は林檎と玉蜀黍、わずかの野菜類、それにポプラの苗木。

8時35分海陽市の繁華街を通り、8時40分萊陽市に入る。萊陽市に入っても見えるのは林檎と玉蜀黍。萊陽市に入るまで、道路沿いの所々に売られる果物は林檎だけだったが、萊陽市に入って、林檎と一緒に梨が売られる。林檎は紅富士で、梨は萊陽梨。8時50分清水河大橋を渡る。清水河、水量は少なく、水は川底の一部を流れるのみ。9時3分峴河大橋を渡り、萊陽市の市城を通る。来る時には暗くて気が付かなかったが、大きな街である。青島まで110kmの道路標識。萊陽市市城を過ぎて、道路沿いの果物売りは梨一色となる。玉蜀黍の広大な農地が広がる。9時40分両側は一面の玉蜀黍、一筆の圃場面積が広い。玉蜀黍の後は小麦を

植える。玉蜀黍畑と思われた所に新しい工場団地。道路沿いの果物売りは見えなくなって久しい。10時28分青島流亭機場に着く。ホテルを出て2時間55分だった。

検疫検査、荷物検査、搭乗手続きを済ませる。搭乗手続きの際、空港職員の不手際で一悶着起る。ターミナルビルは新しくなっても、何かにつけ印象の良くない空港である。そのため、出国手続きまで1時間程かかる。その間、韓京龍さんは空港内で待っていてくれる。大きく手を振って最後の別れをし、出国手続きをして待合室に入る。免税店で月餅と栗入り羊羹とナッツ入りチョコレートを買う。西安からのMU289便、12時38分に動き出し、12時43分離陸する。青島—福岡間1,300km、1時間40分の飛行時間。福岡—青島間より60km長く、飛行時間は同じ。13時ちょうどに時計の針を1時間進める。黄海を越えて、韓国上空から対馬海峡に入り、対馬の北端をかすめて飛び、15時12分福岡空港に着陸する。私の2004年度最初の外国訪問も、こうして無事終了する。

おわりに

中国訪問は、私は最初の1990年8月から数えて9回目、松元は1998年9月に続いて2回目になります。烟台及び烟台大学は初めての訪問でしたが、烟台大学の発展・拡張振りに驚かされ、烟台市のような狭い範囲でも、沿海部の市街地と内陸部の農村では生活レベル・生活環境に大きな格差があり、その差が拡がりつつあることを見ました。行く度に新たな発見と驚きがあり、心が躍ります。新たな人との出会いを求め、飽くなきアジア遍歴は続きます。

文 献

- 江頭和彦 1999 ラオス農林業環境事情。日本土壤肥料学雑誌, 70: 335-340
- 江頭和彦・宜保清一・佐々木慶三・趙 延寧 1999 地すべりと砂漠化—中国、黄土高原と敦煌見聞記—。日本土壤肥料学雑誌, 70: 214-219
- 江頭和彦 2003 ミャンマー紀行—アジアへの誘い—。九州大学大学院農学研究院学芸雑誌, 57: 177-221
- 江頭和彦 2004 黄土高原への道—中国水土保持研究所との学術交流協定調印と同研究所固原試験地訪問—。九州大学大学院農学研究院学芸雑誌, 59: 25-41

Summary

We visited Yantai University, located at Yantai, Shandong province, China, during September 22 and 27, 2004 to join the China-Japan joint symposium on agricultural, forestry and environmental sciences. The joint symposium was well managed by Dr. Jing-Long Han who studied in Kyushu University during 7 years as a Ph.D. student and as a visiting scientist and started to teach at Yantai University from April 2004. The symposium was held on September 24 as an event of the twentieth anniversary from the foundation of Yantai University. Five persons from each side had a presentation with different topics. A lot of students of the School of Environment and Material Engineering of Yantai University attended the joint symposium, and active discussion was exchanged between speakers and attendants. In addition to the joint symposium, we had field-survey on the land use and land development in and around Yantai city. Apple and grape as fruits and maize and wheat as upland crops are main agricultural products in and around Yantai city. We observed conversion of upland crops to fruits in the hilly area, which has been recently progressed from the viewpoint of soil conservation. Along the coast, intensive land development of the originally cropped land has been advanced.